

滋賀県立高等専門学校 初代校長予定者について

令和10年(2028年)4月の新設・開校を目指しております、滋賀県立高等専門学校の初代校長予定者を下記のとおり選任しました。

記

1 初代校長予定者

北村 隆行 氏(京都大学名誉教授、元京都大学理事・副学長)

※ プロフィールについては、裏面参照

2 当面の身分・ポスト

令和6年10月1日付けで、非常勤の滋賀県顧問(県立高専総合ディレクター)、公立大学法人滋賀県立大学県立高専総合ディレクターに就任し、県立高専設置準備業務への従事を開始

3 その他

9月17日にプレスリリース、同日別添資料による記者会見を実施



【学位】 工学博士（京都大学、昭和 61 年）

【専門】 機械（ナノ力学）

【略歴】 昭和 29 年生（69 歳）京都市生

～S52(1977)/3 京都大学工学部卒業
S52(1977)/4～S54(1979)/3 京都大学大学院工学研究科修士課程
S54(1979)/4～S59(1984)/3 財団法人電力中央研究所
S59(1984)/4～H10(1998)/10 京都大学工学部・工学研究科(助手、講師、助教授)
S62(1987)/3～S63(1988)/10 アメリカ航空宇宙局（NASA）研究員
H10(1998)/11～H28(2016)/3 京都大学工学研究科教授
H19(2007)/4～H20(2008)/9 京都大学副学長
H19(2007)/4～H21(2009)/3 京都大学高等教育研究開発推進機構機構長
H20(2008)/11～H21(2009)/3 京都大学副理事
H28(2016)/4～R2(2020)/3 京都大学物理工学系（大学院工学研究科）教授
H28(2016)/4～H30(2018)/3 京都大学大学院工学研究科長・工学部長
R2(2020)/4～ 京都大学名誉教授
R2(2020)/10～R5(2023)/3 京都大学理事・副学長
R5(2023)/4～R6(2024)/6 京都大学総長特別補佐

【現在務めている主な委員等】

文部科学省公的研究費の適正な管理に関する有識者会議委員
科学技術振興機構さきがけ「ナノ力学」研究総括、CREST「ナノ力学」領域アドバイザー
日本学術会議連携会員（機械工学委員会委員など）
日本学術振興会賞審査委員
日本原子力研究開発機構構造・材料技術専門委員会委員
永守財団評議員

【これまでに歴任した主な委員等】

日本学術会議会員（2期）、連携会員（4期）
日本材料学会会長、理事など
日本機械学会関西支部長、理事など
日本工学アカデミー理事など
総合科学技術・イノベーション会議専門委員

【主な受賞歴】

日本材料学会賞： 4回
日本機械学会賞： 5回
Computational Mechanics Award

【主な著書、論文】

著書

- ・ Fracture Nanomechanics Pan Stanford Publishing 1st (2011), 2nd Edition (2016)
- ・ Multiphysics in Nanostructures Springer (2017)

論文

- ・ SrTiO₃ 中の転位から発生する超微小スケールの脆性破壊, Nano Letters, 22, 2077-2084, 2022年3月
- ・ スキルミオン同士の相互作用に及ぼす機械的条件の影響, International Journal of Mechanical Sciences, 261, 108699, 2023年9月

知行合一の技術者を育む ～ 二刀流が拓く未来社会 ～

1 幸福なエンジニア人生の基礎となる「教育」

(1) エンジニアとして自信を持って歩みだす地力を涵養する本校の知行教育

エンジニアは、科学的知識「知」とそれに基づく合理的行動「行」を両輪とする知行合一の心を持って、常に自らの技術力を高めつつ社会に貢献する。そのエンジニア人生は 50 年あまりの長きにわたり、時代によって変化する先端技術を磨き続ける。

本校は、知行の基礎をバランスよく涵養して学生がこれから迎えるエンジニア人生に自信を持って取り組むことができる強靱な地力を形作ることを目指している。また、情報科学の各専門分野技術への浸透が全ての産業技術の新たな根幹であり、コース横断教育とともに情報科学の知行専門教育への融合が本校の特色である。



令和 10 年 (2028 年) 開校予定
滋賀県立高等専門学校初代校長予定

北村 隆行

(2) エンジニア50年時代に必要な生涯をかけて進化するための循環実践

このように生涯をかけて進化し続ける存在であるエンジニアの成長には、長期的な視野が必須である。エンジニアの技術は高等専門学校のみで完結するものではなく、滋賀・日本・世界社会での循環実践を通して育ち続ける。鮎が親しみ深い川や湖を回遊・回帰するように、学生が近隣の多様なエンジニアの活躍する現場を原点イメージとして持ちつつ自らの夢や人生を描くことができる環境が本校の特色である。

2 知行の基礎は学生と教職員の合作による「共育」

知識と行動を教える高専教育そのものが、加速を続ける技術進化とともに変容する性格を有している。すなわち、本校の歩み自体が知行合一の場であり、その技術教育においては学生と教職員がともに作り出してゆく「共に育つ」、「共に挑戦する」意識が大切である。例えば、汎用的資質・能力（コミュニケーションスキル、課題発見解決力、コンセプト創出力など）は知と行の基礎教育活動全般によって育むものである。本校構成員が、進取の気性を胸に共にひとつひとつの科目を大切に挑戦実行することによって新しい時代に生きるエンジニアの基盤養成を実現できる。

3 滋賀の総合力を活かす「協育」

(1) 本校の恵まれた立地環境、近隣の様々な機関との協働技術教育

15 歳～20 歳の学生の技術教育においては、身近な体験や協働に基づく気づきが原体験として心深く刻まれる。本校がキャンパスを構える滋賀には、多様な先端試験分析設備装置を備える研究所群、社会に貢献する多彩な生産設備を有する産業工場群、先進理工学術情報に溢れる大学群がある。さらに、自然環境を大切にす地域と、その保護を進める国や県や自治体の施設群にも恵まれている。自然環境と先端設備に実際に触れつつ調和のとれたそれらとの連携・共創による教えが、エンジニアとしての大切な意欲や意識を形成する基盤となる。

(2) 多重課題などの現実社会での課題に挑戦

現実社会においては複数の課題が同時存在し、それらの解決策には相互矛盾があることも少なくない。エンジニアは、単一課題への即効薬を安易に求めるのではなく、広く実際の視点を持ち誠実に中庸の精神を発揮して協働することを学ぶことが大切である。これに対する実学環境に優れているのが、本校の特色である。